

国宝「一遍上人絵伝」に描かれる踊念仏の踊りのシーケンスを復元

荒木 宏允[†] 谷田部 竜[†] 長澤 可也[‡]

湘南工科大学大学院 工学研究科[†] 湘南工科大学工学部 コンピュータ応用学科[‡]

1. はじめに

全 12 巻で構成される、一遍上人の生涯を描いた国宝「一遍上人絵伝」に描かれる踊念仏は、画像として記録に残る踊りとしては、日本最古のものとし、盆踊りの起源とも言われている。本研究では、この絵伝に描かれている踊りの場面に着目し、3DCG 技術を用いて、絵伝に描かれている踊り手のポーズを取り込んで検討することで、当時の踊りの様子を明らかにすることを目的としている。

2. 踊念仏とは

絵伝において、踊りの場面が初めて現れるのは、4 巻、弘安 2 年(1279 年)、信濃国佐久郡小田切の里(長野県佐久市)の場面である。念仏を唱える上人と僧侶らが、念仏を唱えることで極楽浄土に行くことができると法悦歓喜のあまり自然に踊り始めたのがきっかけであるという[1][2]。この時は、突発的に踊りは始まったので、形式はなかったが、6 巻、弘安 5 年(1282 年)に相模片瀬の浜(藤沢市片瀬海岸)の場面に描かれるものは、踊りの舞台装置としての櫓を建て、その中で大勢の僧侶が一遍上人とともに踊っている様子が描かれており、人に見せるものとして、形式化された踊りとして確立していることが伺える。本研究は、最古の形式化された踊りとして、この 6 巻の場面の踊りについて、検討することにした。

3. 踊り手のポーズについて

6 巻の相模片瀬の浜の踊念仏の場面を図 1 に示す。本図は、絵巻に描かれている全景から、櫓の中で踊っている踊り手を拡大して表示している。本図を見ると、足を上げて前方向に進みながら踊っている様子が見てとれる。しかしなが

ら、そのポーズを一つ一つ観察すると、足の踏み出し方だけでなく、足の上げ方、手の所作などが、人それぞれであり、揃って踊っている様子は伺うことができない。念仏を唱えながら踊ると記述されているにも関わらず、踊りは揃っていないという点が、大きな疑問であった。僧侶らは、念仏を唱える際は、必ず揃って唱えるものである。手にはそれぞれが鐘を持っており、それも、念仏のタイミングに合わせて打っていたと考えられる。このような状況で、なぜ踊りが揃っていないで描かれているのか、この問題を考えるために、踊り手のポーズを一人一人、3DCG の技術を使い、3D 化することにした。



図 1 櫓の中の僧侶

4. 踊りのポーズの取得

踊りのポーズを見るために、図 1 に描かれる僧侶のうち、ほぼ全身が描かれている僧侶だけを選んで番号をつけた。右手前から左手前、それから左後方へ順に 1 から 10 とした。この 10 人の僧侶のポーズを、3DCG ソフトに取り込み、一人一人のポーズを 3D 化した。1 番目の踊り手のポーズに合わせた 3D モデルの人物とオリジナルの絵の人物を図 2 に比較して示す。図 2 と同様に、1~10 番目の踊り手のポーズを 3D 化し、規格化した。僧侶一人一人は頭身や体格が異なっているので僧侶の関節の角度や身体のラインに合わせてポーズを取得した。また、体全体のサイズは、3D モデルと合わせるように、拡大縮小して、1~10 のポーズの取得を行った。その

An animated representation of monks dancing based on the National Treasure “The Illustrated Life of the Venerated Monk, Ippen”

[†]Hironobu ARAKI, Ryu YATABE, Shonan Institute of Technology a graduate school of Engineering

[‡]Kaya NAGASAWA, Shonan Institute of Technology the department of technology a computer application

結果を、図 3-1 及び 3-2 に別けて示す。



図 2 ポーズの取り込み



図 3-1 1～5のポーズ

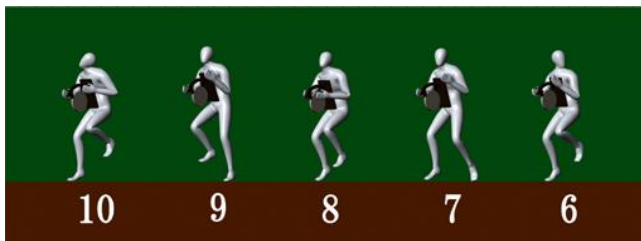


図 3-2 6～10のポーズ

5. 踊りのシーケンス

本研究を開始した時点で考えていたことは、絵伝に描かれている様々なポーズを規格化して、取り込んで、並び順を適当に配置することで、当時の踊りを復元できるのではないかと、いうことであった。そこで、取り込んだ 10 のポーズを様々な順序で組み、踊りのシーケンスを作成し、実際にそのシーケンスを再生させて検討を行った。一つのポーズをコピーして、複数回登場させるシーケンスの検討も行った。

様々な順番のシーケンスを検討した結果、最も単純な順番である、図 1 の 1 から 10 を、単に順番に並べただけのシーケンスが、最も踊りらしいものとなることが、明らかになった。現在、踊念仏として、伝承されている盆踊りの特徴である、同じ側の手と足が同時に前に進むステップも入るところが再現されていることが明らか

となった。さらに、10 番目から 1 番目にループさせても、スムーズに踊りが繋がることも明らかとなった。

6. 考察

一遍上人は捨て聖を信条とし、あらゆる物事や心、考えを捨てて、無心に「南無阿弥陀仏」を唱えることに一生を費やした。そのため、自身の持ち物や関する記録等を、その最期に全て燃やして消してしまった。現在ある国宝「一遍上人絵伝」は、一遍上人の没後、1299 年(正安 1 年)、一遍の弟子にあたる、聖戒が詞書を書き、法眼の地位にあった画僧の円伊が、上人が辿った道を再び辿りながら描いたものであり、その写実性は高いと言われている。

円伊は、当時の踊りを記録する為に、あえて写實的に踊り手が揃った姿を描かずに、踊りのシーケンスを保存することを目的に、絵を描いたのではないかと。踊りの足の運びの進行方向に向かって、順に見ていくことで、どのような踊りであったかがわかるように描いたのではないかと、考えられることが明らかとなった。

7. 結論

復元したポーズを描かれた順番に繋いだシーケンスが、最も自然な踊りが再現できることが明らかとなった。

絵伝に描かれている僧侶のポーズが、不揃いに踊っているように描かれているのは、円伊がこの絵伝に、「踊りのシーケンスを保存し、後世に残すことを意識して描かれた」と考えられることが明らかになった

8. 謝辞

本研究を進めるにあたり、エンターテインメントサイエンス研究所の柳田尚也様には多大なご協力を頂きました。ここに深く感謝いたします。

9. 参考文献

[1]「一遍読み解き事典」

平成 26 年 5 月 25 日 第 1 刷発行

編集者:長島尚道、高野修、砂川博、岡本貞雄、長澤昌幸

発行者:富澤凡子

[2]「日本人の行動と思想 14 一遍」

昭和 46 年 8 月 10 日 初版発行

著者:大橋俊雄

発行者:竹下みな